

アクティブラーニング型授業の効果を支える要因の質的検討

山田嘉徳
(大阪産業大学)

キーワード: アクティブラーニング型授業、外化、深い学習アプローチ、予習、質的調査

報告の趣旨

AL型授業の一般的特徴として、「授業外で深く突き詰める学習」が行われ、それが「外化」を促し、結果として、「深い学び」に寄与する、という一連のプロセスの構造が想定される。AL型授業において、一定の授業外学習が当該授業で起きていることを支えている可能性があることも指摘されている。しかし、AL型授業自体が、なぜそのようなプロセスの構造を有するのかという量的な側面からの検討はありながら、その内実は十分に明らかされていない。AL型授業の何が外化を誘い、結果として深い学びへと導いていくのか、そこでのプロセスについて明らかにすることが、AL型授業の教育効果の知見を確かなものへとしていくうえで、大きな課題の一つとなる。**AL型授業を展開する教員を対象に、授業前後に実施されるプレポスト調査結果を突き合わせた探索的なインタビュー調査の結果を踏まえ、何が学習効果を高めることに寄与したり、寄与しなかったりするの、その背景に存在する要因を質的に探ることを狙いとした調査を行う。**そして、そのようなプロセスについてAL型授業を展開する教員の教授・学習過程に言及する語りを題材に、分析的に記述する。

フィールド

のべ7大学、24授業、15名 (A-Eは2015年度、F-Gは2016年度)

大学	授業	科目特性・授業区分	対象	大学	授業	科目特性・授業区分	対象
A	授業1	教養系演習科目(必修)	a,b	E	授業13	経営学系講義科目(必修)	j
	授業2	家政系講義科目(選択)	b		授業14	心理学系講義科目(選択)	k
	授業3	家政系講義科目(選択)			授業15	心理学系講義科目(必修)	
	授業4	家政系実習科目(選択)	c	F	授業16	理学系講義科目(必修)	l
	授業5	家政系講義科目(選択)	d		授業17	工学系演習科目(必修)	m
B	授業6	教養系講義科目(選択)	e		授業18	語学系演習科目(選択)	n
	授業7	教養系講義科目(選択)			授業19	語学系演習科目(選択)	
C	授業8	教育学系講義科目(必修)	f		授業20	語学系演習科目(選択)	
	授業9	教育学系講義科目(必修)		授業21	語学系演習科目(選択)		
D	授業10	保健学系講義科目(必修)	g	授業22	語学系演習科目(選択)	n	
	授業11	保健学系講義科目(必修)	h	授業23	語学系演習科目(選択)		
	授業12	保健学系講義科目(必修)	i	G	授業24	医学系演習科目(必修)	o

分析

AL尺度 (外化)

【外化主体・対象の重層化】
【内化-外化-内化の学習サイクルへの埋め込み】 外化の基礎形成
【心理的距離の近さ】
【多様性を活かした学習成果物の可視化による外化の触発】
【集団に生じる個人差に対応した形での外化の支援】
【外化の維持を支援する規則】

【外化そのものの機会の頻度の低さ】
【育成されるべき能力との関係に由来する外化の困難さ】
【内化の未達成 (未内化)】
【グループ化のデザインと個人学習との未関連】
【クラス内の分断】
【外化手段の平板化】
外化の非促進の文脈

深い学習アプローチ

知を深める構えの形成
学習方略の効果的な多岐化

【深く学習するための構え (レジリエンス) の形成】
【内化の質を保障する課題設定】
【ギャップの存在と活用】
【模倣と相互教授の集約的な達成】
【レベルの異なる学習成果物 (モデル) の段階的提示】
【理論的な知識を体験から学ぶプロセス】

【内化のつくり込みの浅さ】
【内化の深まりを促しづらくする場】
【膨大な知識を積み上げていく科目での学習】
知の深まりを抑制する環境

予習の仕方

情意面と志向

【予め学んでおかないと不安】
【予め学んでおくことへの当事者意識の存在】
【学びの文脈に触れて生起する情動の喚起】

【与えられた課題に絞って取り組む必要性】
【他授業の課題量と予習の必要性との関連】
【活動の自由度を保障することで生まれる潜在的フリーライダー】
学習のバランス

調査の方法

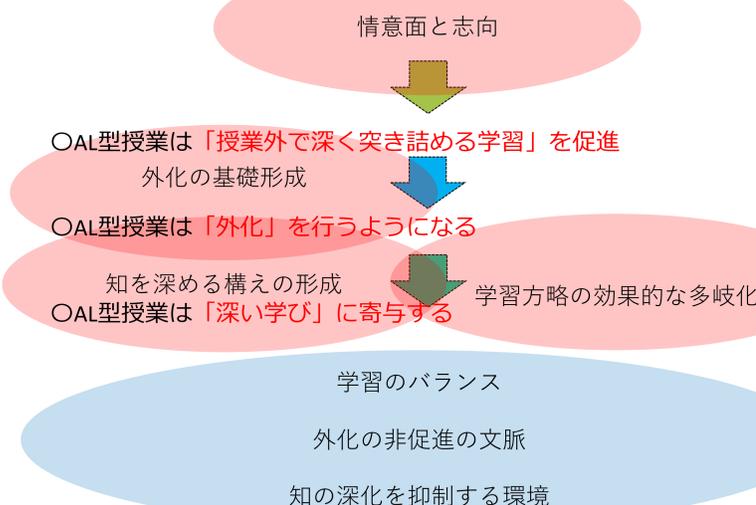
調査目的: アクティブラーニング型授業を展開した授業担当者を対象に、各尺度得点が増減した/しなかった理由について聞き取り調査をし、尺度得点の変化に関係すると考えられる要因を探索的に見出す。

調査方法: AL調査に協力頂いた授業担当者に授業単位で30分 (±10分程度) を目安とする半構造化インタビュー。AL調査のインタビュー担当者 (報告者) が実施。調査期間は、2016年1月~2017年1月。

調査項目: 学習アプローチ、学習動機、予習の仕方 (授業外学習に対する姿勢)、授業における他者観、AL尺度、コンピテンシー、一般的な授業との比較 (分析では下線のものを取り上げる。)

分析方法: 明確に得点が高まったケースと得点が高まらなかったケースを取り上げ、それぞれの得点結果の要因に言及する語りに着目して、対比的に示す。簡明にその内容を示すコードを付与する。

まとめ



参考文献

- Bain, K. (2004). What the best college teachers do. Cambridge: Harvard University Press. ベイン, K. (2008). 『ベストプロフェッサー』 (高橋靖直訳) 玉川大学出版部
- 溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂.
- 溝上慎一・森 朋子・紺田広明・河井 亨・三保紀裕・本田周二・山田嘉徳 (2016) 「Bifactorモデルによるアクティブラーニング (外化) 尺度の開発」 『京都大学高等教育研究』 22, 151-162.